

八王子の民俗ノート No.8

〈調査報告〉澤田家の墓地移転と先祖供養塔について

佐藤 広 柳沢 誠

八王子市寺田町の澤田和夫家の墓地が、国道20号八王子南バイパスの工事によって移転することになった。そこで、施工前の平成28年7月4日の午前に墓地の調査を行った。以下は主にその報告である。

澤田家について 澤田家は、『新編武蔵風土記稿』巻百三 多摩郡之十五の寺田村の項に「旧家 百姓政蔵」とあり、そこには「百姓政蔵は澤田氏という姓で、先祖は今川家の浪士、澤田外記という。遠江国（現在の静岡県西部、遠州）の澤田という地に住んでいたのが澤田と名のる。寺田村に移り住んだ年やその顛末はわからない（筆者が原文を現代語訳）」と書かれている（『新編武蔵国風土記稿』多摩郡6巻、文献出版、1996、274頁）。

菩提寺（ぼだいじ） 澤田和夫氏の話によると、澤田家の菩提寺は、市内山田町の臨濟宗南禅寺派廣園寺（こうおんじ）の塔頭（たっちゅう＝大きな寺院に所属する比較的規模の小さな寺）である向陽院（こうよういん）であった。向陽院は、『八王子市史』下巻によれば、応永9年（1402）に廣園寺2世の太原令演が創建した寺である（同書、1425頁）。この寺は戦前に無住となったため、澤田家は市内大横町の福全院（廣園寺末）の檀家となった。自宅から菩提寺が遠いので、昭和38年（1963）ころには市内山田町の西笑院（せいしょういん）の檀家となった。西笑院もかつては廣園寺の塔頭で、廣園寺4世道運が応永10年（1403）に創建した寺で（同書、1425頁）、向陽院の近くにある。かつて向陽院のあった場所は、廣園寺と西笑院との間で現在は向陽公園となっている。

墓地の位置 澤田和夫家の墓地は、市内寺田町の小名で内手（うちで）というところにある。榛名神社の東側の旧澤田家本家屋敷の裏の丘陵南斜面に、2段にわたってつくられている。この本家屋敷は、あるとき本家の跡取りが亡くなったため、向かい側の谷戸のコガネザワヤト（小金沢谷戸）に分家していた澤田辨次郎（昭和17年〔1942〕没）が、本家の屋敷地に新宅をかまえて継いだという。澤田辨次郎が出た分家は、今も継続し自家の墓地も所有している。

1段目の墓地と墓石 墓地は下の段（1段目）が古く、上の段（2段目）は後に造成したものと伝わる。1段目には東西に一行に墓石が9基並ぶ。墓石を便宜的に向かって左から順に①～⑨とする（後掲図参照）。

①は墓石の右側面に「文禄四乙未年四月八日」、正面右に「政道玄通居士」、正面左に「椿英妙壽禪定尼」、左側面に「□長（慶長）十五庚戌八月八日 澤田氏大先祖墓」と刻まれている。以下□は、文字が刻まれていたと思われるが、剥落などで判読不能な箇所を示す。この墓石には「澤田氏大先祖墓」とあり文禄4年（1595）と慶長15年（1610）の没年が刻まれている。しかし、この墓石は形式などか

ら、彫られている年代より後に澤田氏の「大先祖」、つまり初代夫婦を供養したものと考えられる。

②は墓石の右側面に「元和七辛酉歳正月十四日」、正面右に「□井齋自清□□」、正面左に「□月常照大禪定尼」、左側面に「□永（寛永）二年乙丑天 六月初七日沢田先祖塔」とある。これは「沢田先祖塔」と刻まれ、形式から①とほぼ同時期に供養のために建立されたものと思われる。③は寛政 9 年（1797）銘で女性 1 人の墓。④は寛政 12 年（1800）銘で男性 1 人の墓。③と④の墓石の間には太い朴ノ木（ほうのき）が生えている。施餓鬼塔婆は、いつもこの朴ノ木のところに建てたという。⑤は墓の形が丸い無縫塔（卵塔ともいう）で「小峯宗秀首座」と刻まれ、僧籍にあった方の墓か。⑥は自然石のもの。⑦は延宝 4 年（1676）銘で男性 1 人の墓。墓石の頂部に柱のような突起がある。正面には仏像の姿のようなものが刻まれている。⑧は石の表面が剥離してしまい銘文は不明。⑨は文政 11 年（1828）と文化 13 年（1816）の銘があり、戒名から夫婦と思われる男女の墓で、「武州多摩郡中野邑小池茂兵衛姉 沢田政之丞妻」と妻の生家が刻まれている。

【2段目】



【1段目】



寺田町澤田家墓地の配置概略図

2段目の墓地と墓石 この墓域には、東西横一列に墓石が並ぶ。9 基の江戸時代の墓石がまとまってあり、その東側には昭和に建立した 4 基の墓石、澤田和夫氏の祖父母・父母・澤田家・第二人の墓石がある。

墓石の形 1 段目の①から④と⑨は、縦に長い四角の形で、頂が平らになっている（平頂方形）。⑤は卵のように丸い（無縫塔・卵塔）。⑥は加工していない自然のままの石。⑦は、縦に長い四角形で、頂に突起のようなものがある。⑧は墓石の上部が船の舳先（へさき）のような形になっている（尖頂舟形）。この形は、①から④と⑨の墓石よりも古いものと思われる。

2 段目の①から⑦と⑨は、縦に長い四角で、頂が平らになっている（平頂方形）。⑧は、やはり縦に長い四角であるが、頂が丸みを帯びている（円頂方形）。



澤田家 1 段目（下の段）の墓地



1 段目①の墓石



1 段目②の墓石



澤田家 2 段目の墓地



1 段目⑤の墓石



1 段目⑦の墓石

【改葬とその方法】

墓地にある魂を抜く 平成 28 年 6 月 30 日に、菩提寺である西笑院の住職を招いて魂抜きをした。上の段（2 段目）の墓地で、東方にある父母の墓に向かい、塩・米・酒を供えてから住職が経を唱え、澤田和夫氏夫妻が線香を供えた。

墓石の撤去と遺骨の発掘 7 月 11 日から 12 日にかけて、墓地や墓石などを総合的にあつかう業者に依頼し、墓石の撤去と遺骨の発掘を行った。墓石の撤去に際しては、一つ一つの墓石の正面・右側面・裏面・左側面の四つの面の写真撮影を行った。

12 日になって、市史編さん室から「澤田氏大先祖墓」と「沢田先祖塔」を可能であれば保存したら良いのではとの話があった。そこで 2 基の墓石の保存を考えたが、すでにすべての墓石を移動し一箇所に集めていた。「沢田先祖塔」は剥離などの傷みが激しかった。そこで、「澤田大先祖墓」の 1 基を保存することにした。

墓石の撤去が済むと、墓域内の発掘を行った。上の段（2 段目）の西側から掘りはじめ、作業は墓石撤去を依頼した業者の者 4～5 人が行った。遺骨は、昭和以降没年の方と 2 段目⑦⑧⑨の墓石附近の遺骨が認められ、特に遺物はなかったという。1 段目（下の段）の墓域は、掘ると赤土（あかつち）の地山となっていたという。

納骨と法要 8 月 9 日に、西笑院の墓地に納骨をした。それぞれの遺骨を骨壺に納め、墓地の土も少しばかり持って行って墓地に納めた。そして、9 月 4 日 11 時から、西笑院の本堂で、法要をおこなった。澤田和夫氏夫妻、和夫氏夫妻の兄弟、子、従弟、子の連合いの両親、付き合いの濃い近所の 1 軒のお宅が出席した。

先祖供養塔の行方 「澤田氏大先祖墓」や「沢田氏先祖塔」のような、ある時期に供養のために建立された石塔を、とりあえずここでは先祖供養塔と呼ぶ。澤田和夫氏は、1段目①の「澤田氏大先祖墓」を保存することにされ、西笑院の墓地に移し建立された。本年10月には、文化財保存業者に依頼して、保存処置を行う予定である。

先祖供養塔の意義 近世の地域文化を研究する岩橋清美氏は、『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版、2010）の11頁で、村の変遷を踏まえ、近世社会において歴史意識の画期は2回あるとし、1回目は18世紀初頭、2回目は19世紀初頭であるという。また、中野光浩氏は、「八王子千人同心による武蔵多摩郡の地誌編纂について」（『信濃』45-10、1993）で、市内平町の平家（たいらけ）史料を踏まえ「地誌編纂の影響として、家系図や由緒の整備をあげられる」と述べている。そうしたことから、澤田家の「澤田氏大先祖墓」と「沢田先祖塔」の建立は、村落の変容や村人の歴史意識とも関係があるものと思われ、興味深い資料である。他に同様な事例を見出すことがあるかもしれない。

最後になりましたが本調査において、澤田和夫氏は調査の機会を与您とくださり、先祖供養塔の保存を実行された。心から感謝申し上げます。

調査報告について 最初の調査は、平成28年7月4日（月）で、それは澤田和夫氏から情報をいただいて許可を得て、八王子市市史編さん室の市史編さん専門員柳沢誠と専門管理官佐藤広とで実施した。銘文の読み取りと記録は柳沢誠が、民俗調査は佐藤広が担当した。

参考文献など

- 白井哲哉解説『新編武蔵国風土記稿』多摩郡6巻 文献出版 1996
- 岩橋清美『近世日本の歴史意識と情報空間』名著出版 2010
- 『近世の墓石と墓誌をさぐる』立正大学博物館 2015

八王子市狭間町について

江戸時代に社領5石の御朱印（江戸幕府が、神社や寺院に対して出した朱の印を押したその寺社の領有地を確認する文書）をいただいていた狭間の山王社が不明であると、中世部会の市史編さん専門員から尋ねられた。狭間の神社といえば、市指定無形民俗文化財の「狭間の獅子舞」が奉納される御嶽神社が頭に浮かぶ。山王社についてはわからない。そこで、まずは真福寺と獅子舞保存会の方々を訪問した。不明のときには地元の方々にお聞きする。すると、お陰様で興味深いお話をうかがうことができた。以下に報告する。

行政区画の変遷 狭間は、江戸時代は下柵田村（しもくぬぎだむら）の内にあり、大巻（おおまき）、二軒在家（にけんざいけ）との三集落で一つの村をなしていた。江戸時代の後半に編さんされた『新編武蔵風土記稿』には、下柵田村は家数が65軒とある。江戸時代の末には高家（こうけ：江戸幕府の職名。幕府の儀式などをつかさどった家）の前田家が支配する知行地が467石1升5合、真福寺（しんぷくじ）領が5石であった。下柵田村は、明治初年には神奈川県となった。

明治4年（1871）4月には戸籍法が施行されて戸籍事務のために大区・小区制を実施した。下柵田村

は散田（さんだ）・寺田（てらだ）・館（たて）とともに第9大区第10小区に属した。明治5年（1872）4月、名主・年寄を廃して戸長・副戸長を選出し旧名主や年寄の事務を引き継いだ。

明治6年（1873）5月にはそれまでの戸籍区を廃し、行政区画として区番組制を施行した。下柵田村は散田・寺田・館とともに第9区10番組となった。明治11年（1878）7月に郡区町村編成法が施行され、神奈川県では従来の大区を郡に、小区を町村に再分合させた。町村には江戸時代の呼称を用い、神奈川県南多摩郡下柵田村となった。大小区制が郡区町村制に移行するときに、連合役場の設置が認められ、下柵田と寺田が組合村となった。明治17年（1884）7月には、村ごとに置かれていた戸長と戸長役場を廃止し、新たに連合戸長役場と連合戸長が置かれた。下柵田村は散田村・下長房村（しもながぶさむら）・寺田村・館村・大船村（おおふねむら）とで連合町村となり、戸長役場は散田村に置かれた。

明治22年（1889）4月1日には市制町村制により、散田村・下柵田村・館村・寺田村・大船村・下長房村の6か村で横山村（よこやまむら）が成立した。明治26年（1893）には、西多摩郡・北多摩郡・南多摩郡の三多摩全域が東京府に移管され、東京府南多摩郡横山村となる。昭和30年（1955）4月1日に横山村は、元八王子村・恩方村・川口村・加住村・由井村とともに八王子市に合併し、翌年の昭和31年（1956）に八王子市狭間町となる（「合併町村の沿革」『八王子市史』附編、八王子市役所、1968）。

現在の狭間町 狭間町は、京王高尾線の狭間（はざま）駅の南から南西に町域がのびる。北を東浅川町と初沢町（はつざわまち）、東を柵田町と館町、南は館町、西は初沢町に接している。通勤通学などでは、京王高尾線の狭間駅や高尾駅、JR中央線の高尾駅が使われている。

現在の狭間町は、地形や土地利用などから二つに区分することができる。一つは、町田街道の東側の狭間土地区画整理事業が実施された台地の地域である。これは昭和39年（1964）に事業決定した八王子市施行のもので、事業面積54.4ヘクタール、新市街地と工業団地の整備を目的としたものであった。この地域は狭間駅の南に広がるかつて畑であったところで、駅前には平成26年（2014）10月1日にオープンしたエスフォルタアリーナ八王子（八王子市総合体育館）がある。この体育館の用地は、もとは林野庁の用地であった。この地域には工場、ショッピングセンター、マンションなどがあり、中央を東西に柵田遺跡公園通りが通る。狭間駅の西に東浅川町にかけて狭間公園がある。

もう一つは町田街道の西側で、丘陵の谷戸に沿う古くからの集落があった地域である。谷戸の中央を南から北に水路が下る。この水路は途中から町田街道に沿って東浅川町と初沢町の境を北に進み、JR中央線をくぐって熊野神社前の熊野橋で初沢川と合流し、陵南大橋の西で南浅川に合流する。この水路の上流は、高尾紅葉台団地（たかおこうようだいだんち）の開発にともない行き止まりであった袋状の谷戸が開け、標高の高い南方の山に団地が造成されたため、そこに至る道が整備された。その時、土砂流出などの防災上の観点から、川の整備などもおこなわれた。

西側には、私立高校の総合グラウンド、昭和47年（1972）6月に建立された産業殉職者慰霊堂奉賛会で運営協力している「高尾みころも霊堂」がある。北部に御嶽神社、南部に猿額公園がある。指定文化財は、狭間町には八王子市指定無形民俗文化財の「狭間の獅子舞」が狭間獅子舞保存会によって傳承され、高楽寺（こうらくじ）には八王子市指定史跡の「高楽寺横穴石仏群」がある。

なお、狭間町の人口は、平成28年度8月末日現在の「平成28年度町丁別世帯数及び人口」（八王子市ホームページ）によると、2,790世帯、男3,125人、女3,261人で計6,386人である。

狭間の家数など 以前から狭間にある家数は、高楽寺と真福寺の2か寺を含めて25軒といわれている。事実、明治26年（1893）の記録には26名の名が墨書されている。現在、古くからの家々を数え上

げてみるとそのくらいの戸数となる。明治13年(1880)編成の「皇国地誌」によると、狭間は江戸時代には下栲田村のうちである。狭間は、上(かみ)と下(しも)に分かれるが、明確に区分されているわけではない。年番を上(かみ)と下(しも)で2名ずつ置いた。これは狭間全体の年番である。明治20年(1887)8月から書き始めた「年番順番帳」が遺されている。屋号は特別どの家にもないという。

以上、行政区画の変遷を除き、狭間獅子舞保存会の峯尾満氏、朝倉和男氏から平成27年11月19日に聞き取りした。

ハサマかハザマか 「八王子市の町名」(『文書事務の手引き』八王子市、2012)では、狭間町を「はざまち」と読んでいる。京王高尾線の狭間駅も「はざま」といっている。真福寺の岸本俊一住職の父君である先代が高尾山にお勤めしているとき、京王高尾線の新設駅名について時の町会長から問われた。すると、「桶狭間」は「おけはざま」と濁るから、これからの地域発展を考慮し、「狭間」の読みは「はざま」とするのが多くの人になじむのではないかと答えたという。それで、京王高尾線の狭間駅の駅名は「はざま」という読み方になったといわれる。年輩の土地の人々は、地域を「はさま」と濁らずに呼称している。

江戸時代の『新編武蔵風土記稿』巻百二下 多摩郡之十四下の下栲田村の項には、小名として大牧(オオマキ)、二軒在家(ニケンサイケ)、狭間(ハサマ)と振り仮名がふつてあるが、濁点は記されていない(『新編武蔵風土記稿』巻百二下 多摩郡之十四下)。だから「ニケンザイケ」は「ニケンサイケ」となっている(『新編武蔵国風土記稿』多摩郡6巻、文献出版、159頁)。これではハザマかハサマか確認できない。植田孟縉の『八王子郷名蹟拾遺』には「葉佐間」と万葉仮名のように書かれているので、古くは「ハサマ」といっていたことが分かる。

真福寺の山王権現 現在の八王子市狭間町の山王社とその別当寺(神仏習合の思想に基づいて神社に付属して設けられた寺院の名前。明治元年[1868]の神仏分離令で廃絶あるいは独立した)の真福寺について、多摩郡の部が文政5年(1814)に幕府に献上された『新編武蔵風土記稿』の下栲田村の項に、以下のような記述がある。

山王社 小名(こな)狭間の内、山あいを伝いて奥の方なる尾崎にあり。社領五石の御朱印(ごしゅいん)を賜う。わずかなる社なり。勧請(かんじょう)の年代をしらず。此地の山の根より清水湧出し、北に流ること二丁ばかりにして上栲田村に入る。幅三尺ばかり。この水を社領の水田にそそぐ。

末社

弁天社 小祠なり。

山神社 これも同じ。二祠とも別当寺の巽(たつみ)の方にあり。

第六天社 別当寺の北の方の山上にあり。

稲荷社 本社の方の南の方にあり。

別当真福寺 本社より一丁ばかり東にあり。山王社地に清水あるを以て、山号を水沢という。新義真言宗にて高尾山薬王院の末寺なり。開山詳(つまびらか)ならず。中興法流の祖を秀譽という。享保十三年五月十七日寂せり。本堂五間半に八間。本尊大日坐像にして長一尺ばかり。又本社山王の本地仏薬師の木像あり。立身にして長一尺二寸ばかり。この余大黒の像あり。僧日蓮の作なりという。長一尺五寸ばかりの像なり。

の土地を2回に分けて寄付したという。三間道路を作る前の清水入谷戸の道路は、山際のサンノウサマ（日枝神社）の前のところを通っていた。

実際の道路幅は普段通行するのは荷車やリヤカーであったから、9尺あれば済む。だから、三間道路の道幅は広くて道の両脇には草が生えていた。6月ころに、清水入講中で1日から2日くらいかけて、総出で草むしりを行った。むしった草は、畦畔に積んだ。

日枝神社（ひえじんじや） 地元ではサンノウサマと呼んで、主に清水入谷戸の田中姓の氏神である。南大沢全体の氏神は、八幡神社である。サンノウサマの御神体は石製のもので、神主は町田の井上氏である。氏子は約30軒弱である。清水入谷戸の田中姓が主な氏子であるが、宮上のトウコウジ（東光寺）とかヤマノカミ（山の神）といった屋号などの3軒の田中姓の家と、宮下のニシ（西）という屋号やその分家の佐藤姓の家も氏子であった。

小学校に通うときや、朝晩に神社の前を通るときには頭を下げた。現在、祭礼は4月の第1日曜日だが、かつては4月3日であった。普段はまだ寒さの残る時期で、ヒガンザクラの蕾が開かなかった。暖かい年には少し花が咲き、向かいの山に桜の花が見えた。祭の日には自宅で米の粉の団子をつくり、赤飯を炊いた。田中武雄さんが記憶している範囲では、祭の余興は1回だけ戦前に行ったことがある。なぜ覚えているかということ、田中家で役者を泊めたからで、その時には大塚の西川一座が来た。

神楽師（かぐらし） 清水入谷戸の田中徳兵（とくへい）さんという人が神楽師で、神楽やひょっとこ踊りをおこなった。由木の村内とか町田の小山などに呼ばれて演じていた。今生きていれば120歳くらいだろうか。南大沢の人ではないが太鼓のうまい、キヨジイと呼ばれた多摩市落合の方がいた。長いばち（桴）で太鼓を叩いて、その音は他の人と違っていた。

オコモリ 薬師様のまつりのことをオコモリという。10月10日に八幡神社で行った。薬師様のお堂は往還から東光寺（廃寺）へ上るところの東北にあった。そのお堂にはハンソウサマ（半僧様、半僧坊のこと）も入っていた。お籠りの日にはいつも一反風呂敷で薬師様を包んで八幡様まで大切に背負ってきた。オコモリは今でも八幡神社で行っている。

ハンソウサマ（半僧様） かつては東光寺の下の薬師様が入っているお堂にあった。今は移転している。田中さんは、このお堂が移転した時を含め、これまでに静岡県浜松市の奥山方広寺の半僧坊に3回行ったことがあるという。

お使いなど 八王子の横山や八日町に風呂敷をもって、野猿峠（やえんとうげ）を越えて歩いて出かけた。1年に2〜3回は八王子へ行った。八王子駅のところにあった丸通（現在の日本通運）に、由木から2人通っていた。その人は馬力で由木と八王子を毎日行ったり来たりし、荷物を運んでいた。田中家でも、鉄道のコンテナで運んだ荷を、八王子駅から自宅まで運んでもらったことがある。

あとおし ほうれん草などの野菜を八王子の市場に出荷するとき、子供でもリヤカーの後押しをした。小学3年生以降は、1日おきくらいに野猿峠の頂上の水飲み場のところまで行った。ときには八王子まで行って、伊勢屋の団子を買ってもらって食べた。昭和10年（1935）前後かと思うが、団子が3本で5銭、6本で10銭、大福は5銭であった。牛丼が10銭のころだった。

広盛堂（こうせいどう） 下柚木の学校前に、団子や大福、饅頭を売る広盛堂という店があった。旦那は注文服の仕立て職人で、お店は貸していたのかもしれない。その店は、後に文房具店になった。

小俣さん 洋品屋さんで、自転車で売り歩いていた。現在は店舗が下柚木の小学校前に小俣商店としてある。

アメリカ 南大沢の九段甫谷戸（くだんぼやと）の栗本ツネさんという人が、アメリカへ何年か行ってきた。だから、九段甫谷戸を“アメリカ”と言っていたことがある。

奉公人 農業の奉公人のことをサクデイ（作大）という。サクデイは男で、田中家には松木から所帯を持っている人が来ていた。家の2階に寝ていた。そのころの家には厩（うまや）がつくり込んであった。朝草刈りもやっていてよく働く人であった。決め日といって、来る日を決めて月の半分くらい来てもらう人もいた。また、通いの人もいた。

子守奉公は女性の奉公人で、多摩市和田の小学校6年生の人が3年間くらい来た。子守の他にお勝手の手伝いもする。奉公に出す家では、食い扶持を減らすことができる。奉公の支払いは、前金で親に渡す。1年とか2年とかの年季を決める。年季が長くなると金額は安くなる。農業だけで食べていける家は、南大沢で10軒くらいしかなかった。多くの家では、ヒョウトリといって仕事に出る家が多かった。

子供たちの遊びと仲間意識 小学校5年生くらいのころ、三間道路の工事の際、工事が終わるとトロッコがレールからはずされて、底を天に向けて置いてあった。そのトロッコを子供たちでレールにもどし、400メートルの間ニシヤトまで走らせた。昭和2～3年（1927～28）の半ばころのことである。その時、清水入谷戸の子供たちだけで乗って、カシャゴ（柏木谷戸 かしわぎやと）の子供たちは乗せなかった。そのように、子どもでも講中の仲間意識が強かった。トロッコには松の丸太のブレーキが付いていた。

夏は学校から帰ると、道ではなく山の中を急いで歩いて別所の築池（つくいけ）に泳ぎに行った。町田の小山田から来た人には、築池では泳がせなかった。この池では観賞魚会社が鯉の養殖を行っていて、青木さんという別所の人が番人をしていた。別所にある長池は、ジュンサイが多くあって泳げなかった。

子供のころは、カシャゴ（柏木谷戸）とシミズリ（清水入谷戸）のものでは、お互いに悪口を言い合ったりしたこともあった。（※ この項は、筆者が地域意識を探るためにうかがい、当時、子供たちが南大沢という大字の範囲の意識より、その内の講中という範囲の意識が強かったことが理解できる）

農工銀行 立川にあって、土地を購入したりするときに融資してもらった。米や麦、糸をとってお金を返した。

アスパラガス 父親は農事試験場などへも出入りして、新しい農作物の生産を試みたりした。昭和12年（1937）か13年ころのことか、アスパラガスをつくってみたが八王子の市場では売れなかった。そこで、東京へ持っていったら売れた。エビイモとかウドなどもつくった。

ウジ茶 ウジチャという大葉のお茶を、八丈島から送ってもらって栽培した。昭和ひとけたのころのことである。

田中家の畑 4反6畝12歩の広さのマルヤマアラクという畑があった。現在の尾根幹線道路の高架の下のところにあった。また、ミズバと呼んでいる畑があって、それはマルヤマアラクの手前で、今の斎場の左側で小山田境にあった。その畑は戦車道路の建設で、戦車道路用地となった。

戦車道路 戦前、戦車道路の工事には多くの朝鮮半島から来た人々が働いていた。トロッコを3台から4台使って土を運んだ。ボウガシラ（棒頭）という親分のような日本人が、工事を仕切っていた。キフジで編んだモッコで土を運んでいた。天秤棒は長さが6尺から7尺で、太い孟宗竹を使っていた。トロッコにスコップで土を入れるときに、作業が遅いとか早いとか喧嘩（けんか）をしていた。ボウガシラが、モッコに土の盛りが悪い、もっと盛れ！とか言って、天秤棒で担ぐ人の尻を叩いていたのを見たことがある。

（佐藤 広）

【市史、民俗関係の新刊紹介】

『八王子市史叢書5 八王子写真民俗誌』平成28年3月31日発行 1,000円

本書は、A5判、380ページで、八王子市市史編集専門部会民俗部会の編集になる。第1章から第12章までは、合計320項目にわたって写真1枚ごとに説明を付け、さらに1枚の写真の中に写っている個々のモノや状態に番号を付けて説明している。第13章は、浅川写真館が昭和11年（1936）の市制20周年を記念して発行した『八王子市夏祭写真帖』を再掲し、八王子の祭礼の歴史的・民俗的背景を概説している。

本書は、市民が暮らしの中で保存してきた写真を、「人文学資料としての写真」（小川直之 本書序文）として位置付け、「写真からの生活史叙述」（同前）を目的に編集したものである。おそらく、こうした写真資料への取り組みは自治体史編さんとしてははじめてのことであろう。多くの市民の方々にこの意図をご理解いただき、ご活用いただければありがたい。

◆八王子市市史編集専門部会 民俗部会のメンバー◆

- | | | |
|-----------|--------------------|-----------------------------|
| 1. 部会長 | 小川 直之（おがわ なおゆき） | 國學院大學教授 |
| 2. 副部会長 | 津山 正幹（つやま せいかん） | 八王子市文化財保護審議会委員 |
| 3. 部会委員 | 小野寺 節子（おのでら せつこ） | 文化審議会専門委員（文化財分科会） |
| 4. 部会委員 | 加藤 隆志（かとう たかし） | 相模原市立博物館学芸員 |
| 5. 部会委員 | 入江 英弥（いりえ ひでや） | 弘前学院大学准教授 |
| 6. 部会委員 | 宮本 八恵子（みやもと やえこ） | 日本民具学会会員 |
| 7. 専門調査員 | 大藪 裕子（おおやぶ ゆうこ） | 東村山ふるさと歴史館学芸員 |
| 8. 専門調査員 | 神 かほり（じん かほり） | 日本民俗学会会員 |
| 9. 専門調査員 | 美甘 由紀子（みかも ゆきこ） | 八王子市郷土資料館学芸員 |
| 10. 専門調査員 | 高久 舞（たかひさ まい） | 國學院大學研究開発機構研究開発推進センター 客員研究員 |
| 11. 専門調査員 | 三代 綾（みしろ あや） | 國學院大學大学院生 |
| 12. 専門調査員 | 波田 尚大（はだ なおひろ） | 武蔵野ふるさと歴史館学芸員 |
| 13. 調査員 | 横川 貴衣（よこかわ きえ） | 國學院大學生 |
| 14. 調査員 | 横川 真之輔（よこかわ しんのすけ） | 日本文化大學生 |

<問い合わせ先>八王子市市史編さん室

〒193-0943 八王子市寺田町1-4-5 番地3

電話 042-666-1511 / FAX 042-666-1512

E-mail b420000@city.hachioji.tokyo.jp

ホームページ <http://www.city.hachioji.tokyo.jp/seisaku/13570/index.html>